2. 寄港の道しるべにみる歴史的風致

（1）はじめに

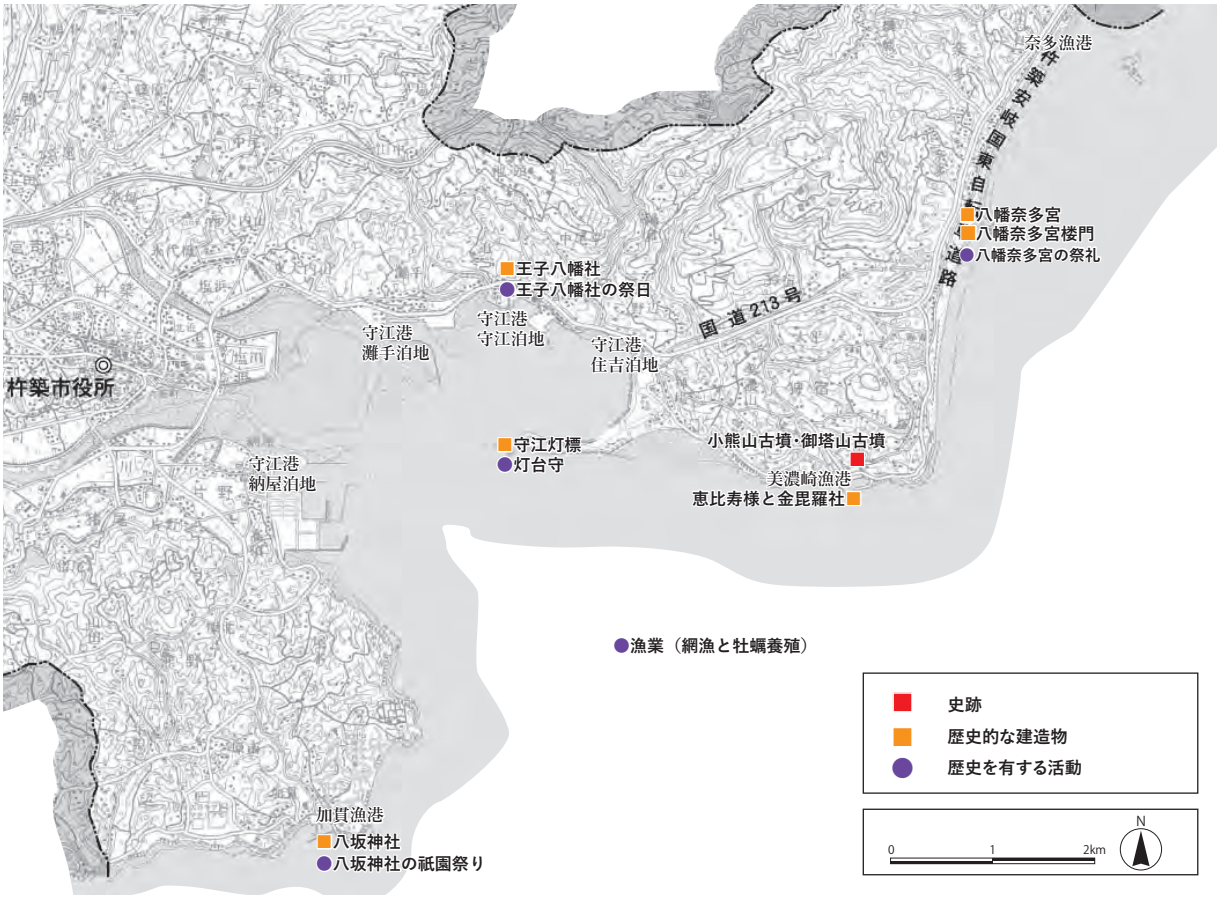
本市の東部は別府湾とその一部である守江湾に面しており、豊かな漁場として、また、海上交通の要所として人々の活動の場となっている。

現在、本市のシラス漁獲量は県下最大であり、近年では牡蠣の養殖も最大の水揚げ量となっている。当地で行われている漁法は『大分県漁業誌』（明治23年（1890））にもあるように網漁が中心であり、現在も「小鰮網漁」がもととなっている船曳漁によるシラス漁が盛んに行われている。

沿岸部には大熊山と小熊山があり、これらは江戸時代の絵師たちによって当地域のシンボルまたは目印として描き続けられてきた。海から目立つ小熊山の頂上には3世紀後半以降に古墳が造られ、さらに大熊山と海岸の間にある灯籠山と呼ばれる小丘には4世紀末以降に御塔山古墳が造られた。実際に守江湾周辺を漁場としている漁師たちは自身の位置を把握する目安として大熊山と両古墳がある山を目印としている。

また、両古墳の北側の沿岸には宇佐神宮とも関わりの深い八幡奈多宮があり、漁師が毎年8月の例祭に合わせて海上祈願祭を行うなど漁業を生業とする人々の信仰も厚い。

さらに、守江湾は、江戸時代以前から九州から瀬戸内海へ渡るための重要な航路であり、藩主の参勤交代や七島藺の輸出港として海上交通の要所であった。当然、寄港する船も多く、船による事故を防ぐため、明治33年（1900）には、奈狩江村（現在の杵築市大字守江・狩宿・奈多・横城）の村民願いによって灯台が建造され、今もなお守り続けられている。



港の位置

（２）寄港の道しるべにみる歴史的風致の構成

1)海上の営み

ア）海上の営みに関わる町並みと歴史的な建造物

●漁村の町並み

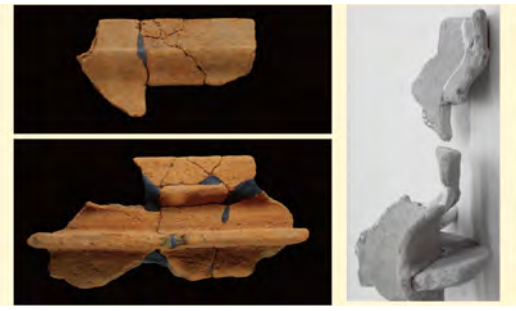
奈多漁港、美濃崎漁港、守江港住吉泊地・守江泊地・灘手泊地・納屋泊地、加貫漁港と、沿岸部各地に漁港が設けられている。漁港の近くには、漁村が形成され、歴史的な建造物が残る漁村もある。こうした漁村の町並みは漁業を営む舞台として、良好な佇（たたず）まいを現在に伝えている。

加貫漁港周辺の町並み

納屋泊地周辺の町並み

●小熊山古墳・御塔山古墳（史跡）

大字狩宿に位置する小熊山古墳は、3世紀後半から4世紀初期の大分県最大級の前方後円墳であり、九州内で最古の円筒埴輪（えんとうはにわ）が出土している。また同地区には5世紀前半の御塔山古墳があり、これは九州最大級の円墳である。小熊山古墳を頂上に持つ小熊山は、大熊山と一緒に当地のシンボルとして描かれていることが多い。また御塔山古墳がある小丘は、別名、灯籠山と呼ばれ、寛永19年（1642）には当時の木付城主小笠原忠知が灯台を建設した。このことからも、両古墳の頂上は海を見渡すことができ、同時に海上からも目につきやすい場所にだったからこそ頂上に古墳が築造されたといえる。



小熊山古墳の出土品（九州最古の円筒埴輪）

小熊山古墳（上）、御塔山古墳（下）

海上からみた小熊山古墳、御塔山古墳

●守江灯標

守江港の歴史は古く、参勤交代が行われた江戸時代から杵築藩以外の大名も寄港する内海航路の重要な港の一つであった。明治期には七島藺の搬出港として賑わった。時化（しけ）の夜になると難破する船が多発したため、河野豊次郎（こうのとよじろう）、河野喜平（こうのきへい）が村長手嶋次郎に灯台の必要性を訴え、明治31年（1898）に「守江港柱燈立標建設」議案が提出され、同32年（1899）9月起工、同33（1900）年4月竣工し8月1日に初めて灯がともされた。

守江灯標

護江浦真景（恵比寿様と金毘羅社）

●恵比寿様と金毘羅社（美濃崎）

昭和43年（1968）発行の『杵築市誌』には、金毘羅社について「漁港の南鼻に上ると公園かと思われる広場がある。もとは大きい社殿もあったのだろうが、今は小さな本殿が新しくできている」とある。現状では、石祠と丸に金の紋を施した石額が木製の鞘殿に収まっており、社殿に続く石段登り口には昭和11年（1936）の建立記念碑が建つ。また金毘羅社の一段下がった場所には、美濃崎漁師が信仰する恵比寿様の石殿がある。祠の横には平成4年（1992）の改築記念碑があり、これによれば恵比寿様は昭和6年（1931）に当時の打瀬船で漁をしていた漁師が大漁祈願のために建立したと記されている。ところが『護江浦真景』（嘉永3年田辺文琦筆）には美濃崎漁港の南には突き出した鼻が描かれ、その頂上には石祠が2基描かれていることから、江戸期から信仰対象となる物は存在し、両祠とも近代建立ではなく改築であることがうかがえる。

美濃崎の金毘羅社

美濃崎の恵比寿様

イ）海上の営みに関わる人々の活動

●漁業（網漁と牡蠣養殖）

伊予灘や守江湾では、網漁と牡蠣（かき）養殖が盛んである。

杵築藩の御絵師である足立秋英が描いた『真景百図』に収められている102枚の風景図には奈多浜で鰯網漁をしている風景が描かれている。また、明治23年（1890）の『大分県漁業誌』にある速見郡と東国東郡の漁法は13種で、その多くが網漁である。主な魚種は、コノシロやスズキ、タイ、コイワシであった。現代でも網漁が盛んに行われ、特に

伝統漁法「小鰯網漁」がもととなっている船曳漁が中心となっている。

また、守江湾には大小9つの河川が流入し、海中栄養分が豊富で極上の牡蠣を生み出し、年間の生産量は約150トン前後で県内生産量の約9割を占めている。

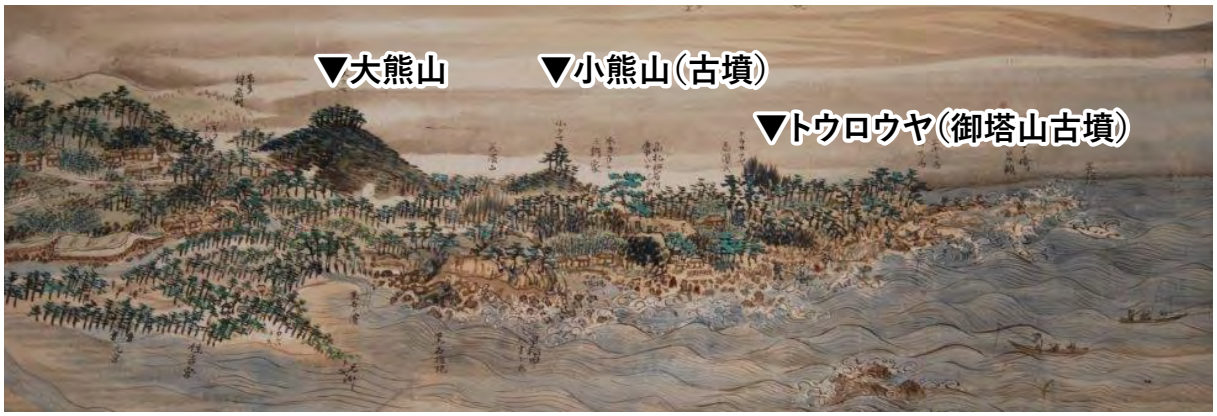
戦後、守江の横山氏がドラム缶の浮力を利用して筏式垂下養殖を行ったのが始まりとされる。その後、昭和28年（1953）に灘手地区の清末氏が臼杵市下ノ江から種ガキを購入して牡蠣養殖に本格的に取組むようになった。

このように古くから海上を舞台とした人々の営みが続けられてきた。船に乗り、海へ出た人々は自身の位置確認のため、目印が必要だった。特に漁師は自身が知る良い漁場で網を下ろすために山や鼻と呼ばれる海に突き出した崖、岸部に建つ神社や寺などの目立つ建物などを目印にした。守江湾周辺の漁師たちが目印としている代表的なものが大熊山と２つの古墳を含む狩宿地区の山である。伊予灘方面に向かった漁師は帰路の目印

真景百図（奈多浜での鰯漁の様子）

養殖業

海上から見た小熊山古墳と御塔山古墳



護江浦真景（海上からみた小熊山古墳）

として小熊山とその後ろにある大熊山を目指す。また別府湾で漁を行う場合は、大熊山や小熊山と加貫鼻を直線で結んだラインを基準として、守江湾内方向に進み権現鼻で加貫鼻が見えなくなる場所は海底の瀬が多く網漁をするには難しいなど漁場を判断するための目印としている。

このほかにも別府湾沖に出た場合は、王子八幡社と権現鼻や住吉浜の砂嘴先にある守江灯標、杵築城と権現鼻など漁師ごとの目印がある。これら現在でも目印になっているものの多くが嘉永3年（1850）に藩絵師田辺文琦（1801−1869）が守江湾を海から一望して描いた『護江浦真景』にも描かれおり、大熊山・小熊山をはじめ王子八幡社の鳥居などが目印となっていることを示している。

護江浦真景（海上からみた王子八幡社）

王子八幡社鳥居

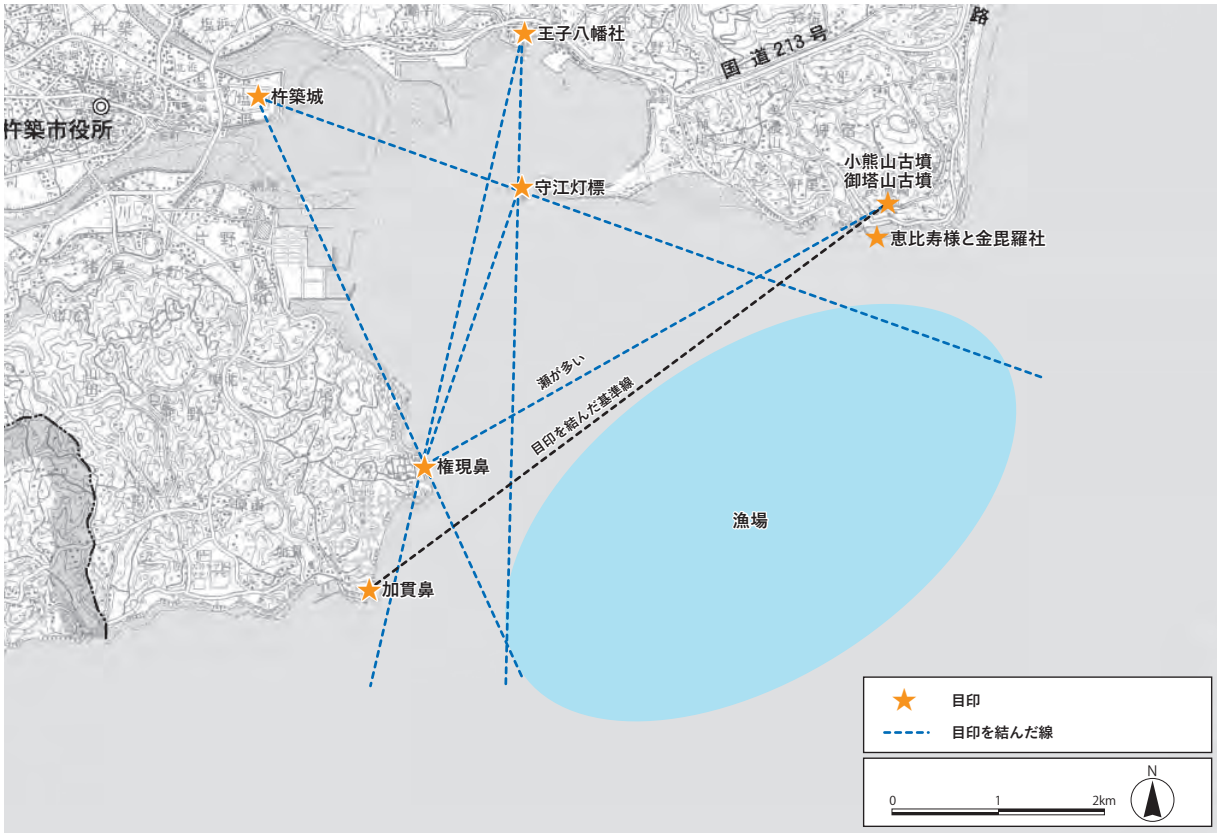


図　目印の位置

●灯台守

奈狩江灯標（現在の守江灯標）の明かりは、はじめ灯油を燃料とし、昭和24年（1949）にガス、昭和48年（1973）にバッテリーへと変化し、現在では太陽電池となっている。

創建当時の灯台守は、２人制で、主な仕事は燃料の補給と掃除であった。油がなくなると、干潮時であれば一斗缶を２人で六尺棒につるして運び、満潮時は伝馬船で運んだ。特に大変な仕事はススで汚れたガラスや火屋（ほや）の掃除であった。灯台守の道具箱には、油を入れるための漏斗（じょうご）や交換用のガラス製の火屋が入っており、当時の作業をうかがい知ることができる。現在、燃料の変化により灯台守の作業は変化したものの、代々灯台守を勤めてきた河野家には海上保安庁より灯火看視などの作業が委嘱されており、灯台守によって灯標の明かりは守り続けられている。

灯油時代の灯標（昭和24年（1949））

ガス灯時代の灯標（昭和48年（1973））

灯台守の道具箱

2)豊漁・海運安全祈願

2)-1　奈多宮の杵築漁師

ア）八幡奈多宮の杵築漁師に関わる歴史的な建造物

●八幡奈多宮

現在、八幡奈多宮が発行している『八幡奈多宮由緒』による社殿造営に関する記述をまとめると次のとおりである。

社殿の造営は初代宇佐宿祢公基（うさすくねきみもと）が勅を奉じて宮殿を造営したことに始まる。天文15年（1546）に大友義鑑が社殿造替するが、慶長元年（1596）の大地震による津波ですべて流失。寛永４年（1627）に本殿、白殿（申殿）、拝殿を建立、同９年（1632）楼門、鳥居、手水鉢（現存）を造営。明治14年（1881）に本殿、同15年（1882）に白殿（申殿）、拝殿、若宮、北辰殿の改修・造営とある。この社殿配置は文政８年（1825）から明治28年（1895）に活躍した杵築藩の御絵師足立秋英が描いた『真景百図』（市指定有形文化財）にも描かれており、現在の配置と同様である。

八幡奈多宮拝殿

また参道脇にある改修記念碑によれば、本殿は明治32年（1899）と平成9年（1997）にも改修が行われていることがわかる。

本殿は、切妻造平入の社殿2つを前後につなぎ、両方の屋根が接する部分に樋を設けた八幡造となっており、屋根は銅板葺で鬼部や陸棟には金色の菊紋が施されている。前面には1間の向拝が付き、周りを縁で囲む。本殿の正面には桁行3間、梁間3間、銅板葺の白殿（申殿）が建ち、さらに拝殿が続く。拝殿は、桁行3間、梁間2間で丸柱、切妻造平入、桟瓦葺、正面1間の向拝付きの建物を中心に、両翼に桁行5間、梁間2間で角柱、桟瓦葺の建物が一体となっている。拝殿両翼の端から本殿側は、石垣と三本線の筋塀に囲まれている。

このほかにも境内奥には、本殿の右側には若宮社、左側には北辰殿が建つ。若宮社は正面を本殿に向けて建っており、三間社切妻造正面1間向拝付で、屋根は一文字の銅板葺、四方を縁で囲む。また北辰殿も形式は若宮社と同様だが、正面は本殿と同じ海に向いている。

また拝殿屋内には、大正13年（1924）から現代までの寄付札が多数掲げられており、なかには逓信大臣や衆議院議長を務めた杵築出身の政治家元田肇や綾部健太郎の寄付札もある。杵築地域では、宮司地区の若宮八幡社や城下町内にある飛松天満社と並ぶ信仰の厚い神社である。

真景百図（八幡奈多宮の図）

●八幡奈多宮楼門（市指定有形文化財）

八幡奈多宮楼門は棟札に、寛永4年（1627）の建立記録がある。

楼門の形式は四脚門で、柱すべてがたちの高い木太い丸柱、入母屋造の本瓦葺である。

また『大分県の近世寺社建築－大分県文化財調査報告第74輯－』よれば、昭和59年（1984）から昭和60年（1985）にかけて屋根葺替え工事をし、軒桁より上を新しくし、格天井も張り替える工事を行っているため実証性は薄いが、中備に本蟇股を前後に2個ずつ配すという納まりが良くない形であることから、もとは一間一戸楼門であった可能性が考えられるとある。

八幡奈多宮楼門

八幡奈多宮楼門棟札

イ）八幡奈多宮の杵築漁師に関わる人々の活動

●八幡奈多宮の祭礼

寛政19年（1642）の『祭礼歳時記』によると、八幡奈多宮では年間74もの祭祀があったようであるが、現在の主な行事は9つとなっている。

現在行われている主な行事は、1月元旦の初日詣、2月11日の祈年祭、4月5日の例祭（神幸祭）、6月30日の大祓、8月7日の夏越祭（なごしまつり）、10月15日の中秋祭、11月15日の七五三祭、11月23日の新嘗祭、12月31日の年越祭であり、固定日に各祭事が執り行われる。

なかでも4、8、10、11月を大祭としており、4月の例祭（神幸祭ともいう）では五穀豊穣願う農家のための祭りとして境内に設けた斎田で御田植祭（県指定無形民俗文化財）が行われ、3基の神輿が氏子地域を巡る御神幸が行われる。10月の中秋祭は、生きるために殺生をした動物への感謝する放生会であり、御の池という場所に鯉の放流を行う。11月の新嘗祭では収穫祭として神事が執り行われる。このように八幡奈多宮では、年間を通して様々な祭礼があり、農業だけでなく、漁業を営む地元住民にとっても厚く信仰されている。

特に漁業と深い関わりをもつのが、8月7日に豊漁と航海安全を願って行われる夏越祭である。祭礼は、主に守江湾を漁場とする漁業関係者によって執り行われる。

当日は、午前中、八幡奈多宮総代と漁業関係者の代表が集まり神主による神事に始まり、海上安全祈願祭、海上パレードが催される。海上祈願祭からは漁業関係者が主催となる行事で、神社前の浜に出て神事と美濃崎漁師青年部が育てた伊勢海老の稚魚の放流が行われる。祭の最後を締めくくるのが海上パレードで、大漁旗を掲げた漁船10隻ほどが神社前の沿岸部で一列になって

御田植祭

仲秋祭

夏越祭の海上パレード

夏越祭の海上パレード

お神酒をまきながら3周回ってパレードを行う。船を出すのは灘手、美濃崎、納屋の漁師で、各漁港から数隻ずつ出すことになっている。もっとも多く漁船を出す美濃崎漁港では、パレード参加者は当番制としている。パレードの先導を務めることは漁師にとってとても名誉なこととされている。

夏越祭の神事

夏越祭の神事

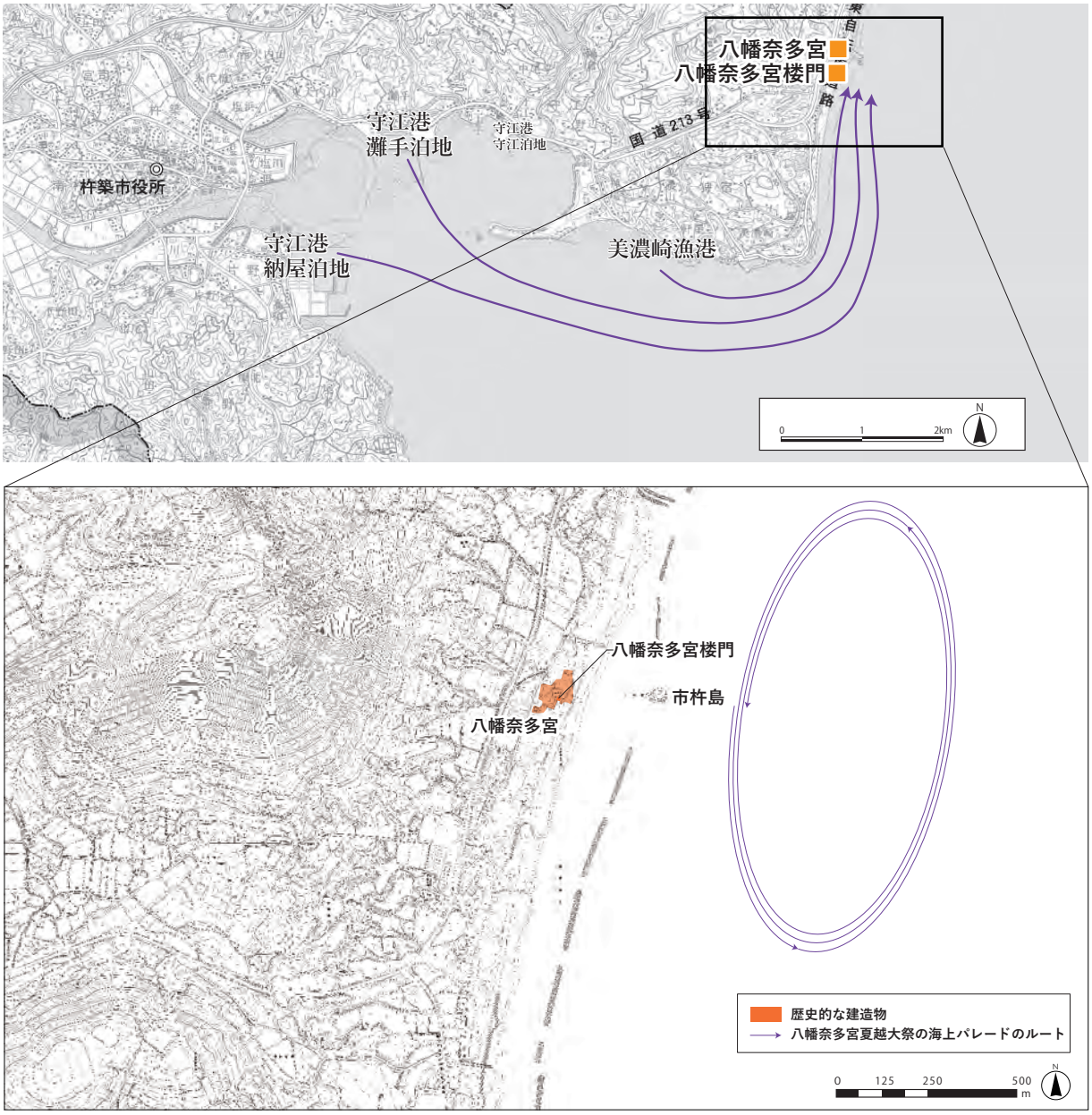


図　八幡奈多宮の祭礼の範囲

2)-2　王子八幡社（おうじはちまんしゃ）の海運・豊漁祈願

ア）王子八幡社の海運・豊漁祈願に関わる歴史的な建造物

●王子八幡社

王子八幡社の由緒は、境内に建つ説明板によれば、織田信長の家臣高橋六郎左衛門が織田一族のために四国に渡ろうとして灘手村に漂着し、主君の加護を祈って天正4年（1576）に宇佐八幡を灘手村梅ヶ崎に勧請したとある。明治30年（1897）の『神社慣例』には、「例祭日、夏は旧6月15日、冬は旧11月4日」とあり、現在は、夏は旧暦のまま、冬は新暦の11月3日に固定している。一方、明治４年（1871）に書き改められた『高橋家文書』によれば、元亀３年(1572)、灘手村の高橋六左衛門が漁をしているなか、光る石を引き上げ家に持ち帰ったところ夢枕に鬼神が現れ王子八幡社と名乗った。これを隣村の守江村佐々木佐助に相談し、守江の岸に天正4年（1576）に石を祀ったとある。創建のきっかけは異なるが時期は一致している。

また、田辺文琦が描いた『護江浦真景』に現在と同じように海際に建てられた神社の姿がある。そのほか、拝殿内に、昭和32年（1957）の拝殿修理記念献木と昭和34年（1959）の本殿其他修理費寄付者芳名簿があり、現在の拝殿及び本殿はこのとき修理したものと分かる。

王子八幡社の本殿をはじめ、拝殿や鳥居は海に向かって建てられている。岩場の多い浜辺には第一鳥居が建ち、岸との境には人の背丈ほどの石垣が築かれ、その後ろに境内が広がる。石垣中央にある石段を上り第二鳥居をくぐった正面に拝殿、渡殿、本殿と続き、本殿右側には神饌所が建つ。

王子八幡社拝殿

本殿は二間社流造、屋根は銅板の一文字葺、棟には３本の堅魚木、鬼部には杵築藩の家紋である雪笹紋を施す。背面を除く３面に縁、左右に脇障子がつき、軒裏を二重軒で仕上げる。本殿正面の渡殿と拝殿は一体化しており、拝殿は桁行５間、梁間３間の入母屋造平入桟瓦葺で前面に１間の向拝付き、渡殿は桁行２間、梁間３間の入母屋造妻入桟瓦葺で左右に縁が付く。どちらの鬼瓦にも本殿同様雪笹紋が施されている。これは能見松平家が正保２年（1645）に入部以後、王子八幡社を城鬼門の守神と定め、藩の重要な神社としたことによる。

王子八幡社鳥居

イ）王子八幡社の海運・豊漁祈願に関わる人々の活動

●王子八幡社の祭日

王子八幡社の例祭は3月21日の祈年祭として行わる「年祈（としごい）のまつり」・商工農漁事始、

旧6月14日の夏祭として行われる虫祈祷・大祓、11月3日の例祭（通称、冬祭）として行われる新穀農豊漁感謝がある。

明治30年（1897）の『神社慣例』には、「例祭日、夏は旧6月15日、冬は旧11月4日」とあり、現在は、夏は旧暦のまま、冬は新暦の11月3日に固定している。

なかでも漁業に関係が深い祭礼が夏祭である。夏祭は海を豊かにする山の恵みを感謝し、守江湾に流れ込む江頭川、神田川、天村川の河口にそれぞれ御幣を供える。当日は15時ころに３か所の川に御幣を建て、神社の鳥居に注連縄などの準備を始める。17時から神事が行われ、総代は直会を行う。20時ころになると境内に地域の人が集まり、奉納盆踊りを行う。

また守江の港は、江戸時代には参勤交代の出発場所として藩主の茶屋が建てられ、近代は大阪との貿易港として古くから漁村としてではなく港町として発展してきた町であることが『神社慣例』（明治30（1897））にある「冬は古は行幸ありしも何のころにか中止し、明治9年（1876）より再興し、晴天3日間芝居等をば興行し、古よりは神賑を増進す」という冬祭の様子を記した記述からもうかがえる。

冬祭では、王子八幡社での神事の後、大名行列を思わせる毛槍、弓、太刀などをもった子供行列と御神幸が行われる。行列は、塩湯（露払い）（1）を先頭に、社名旗（1）、大榊（1）、猿田彦（1）、毛槍（16）、弓人（数名）、鉄砲（数名）、太刀（数名）、御供・神官、大傘（1）、賽銭箱（2）、神輿（軽トラ1台）、太鼓（軽トラ1台・叩き手1）、五色旗とお供（数名）の順番で、神社から旧国道に沿って天村川の手前にある御旅所まで行き同じ道を戻ってくる。神社から旧道までの参道や往路復路の途中人で集まる場所では毛槍を投げ渡しや片膝をついて毛槍を地面と水平にするなどの演技が行われる。毛槍役は4年生以上の子供で、3年生は弓、2年生は鉄砲、1年生は太刀、幼稚園生以下は五色旗と配役が決まっており、幼少期から行事に参加することで地域の伝統を継承している。

王子八幡社の拝殿内の様子

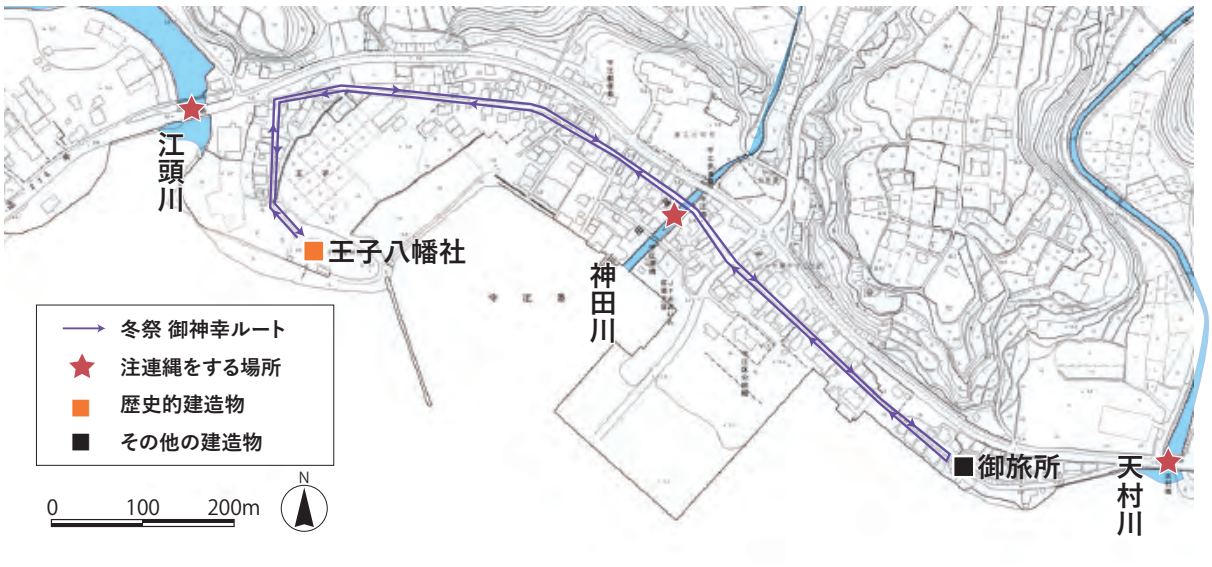
天村川に供えられた注連縄

神田川での神事

御神幸（毛槍）

御神幸（弓）

御神幸（五色旗）



王子八幡社冬祭巡行経路

2)-3　加貫漁港の八坂神社

ア）加貫漁港の八坂神社に関わる歴史的な建造物

●八坂神社

加貫漁港の内岸にあり、地元では祇園様と呼ばれている。拝殿は、昭和40年（1965）9月の台風で倒壊したが、翌41年（1966）夏に再建された。境内の中心に拝殿を据え、拝殿裏には、弘化3年（1846）4月15日の銘である御神体を祀る石殿があり、横には文政6年（1823）銘で天照大神をはじめとして5神の名を各面に彫った石造五角柱が建つ。この五角柱は、土地の神に感謝する社日講の信仰対象である。

このほかにも境内入口には、「皇紀二千六百年（1940年）」銘の鳥居が建ち、拝殿までの参道右側には平成2年（1990）に移動された金刀比羅宮が建つ。金刀比羅宮はもともと加貫浜から生常に上る左手の崖上にあったが崩れるおそれがあったためそのままの形で八坂神社境内に移された。移されたのは、文政3年（1820）銘の石造小鳥居、石灯籠2基、安政5年（1858）銘の金刀比羅宮石殿と同形の石殿1基である。

八坂神社鳥居

八坂神社御神体石殿ほか

金刀比羅宮石殿と鳥居

イ）加賀漁港の八坂神社に関わる人々の活動

●八坂神社の祇園祭り

八坂神社では7月15日に祇園祭りが行われる。

『神社慣例』（明治30年（1897））に記載された祭日は11月15日となっているが、現在神事を担当している神職によれば、当社の祭日は7月15日の1日のみであり、先代の神職の時も同様であったという。また同資料には「祭日には神楽あり」とあり、現在の神事の内容とも合致している。

一週間前に総代8名が集まり、注連縄作りや境内の掃除が行われる。祭り当日は、朝から御神体を納めている石殿をはじめ、拝殿、鳥居、金刀比羅宮石殿など境内にある信仰対象に新しい注連縄を飾り、御幣をさげる。

神事は神主による祝詞奏上や玉串奉納だけでなく、年田神楽の楽員による宮神楽が奉納される。宮神楽は、烏帽子、狩衣姿で鈴と扇を持って舞う直面の神楽で、神事の最初と玉串奉納前の2回奉納される。

神事終了後はすぐ近くにある公民館に場所を移して直会が行われる。

八坂神社祭礼

図　八坂神社祭礼の範囲

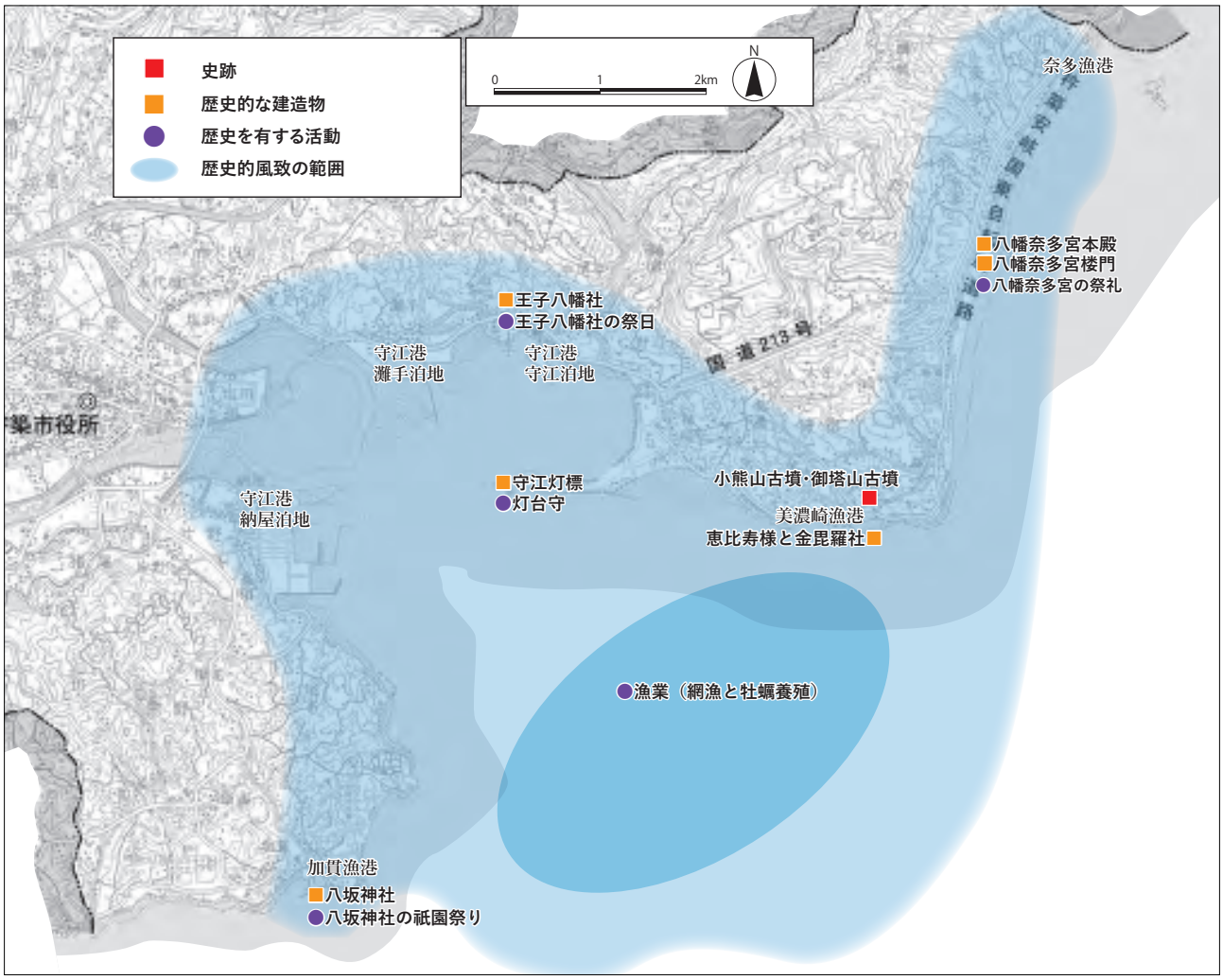
（３）まとめ

別府湾とその一部である守江湾は、古来から豊かな漁場として、また、海上交通の要衝として、重要な機能を担ってきた。数々の港が配され、漁村が形成された。

漁師や海上を行き交う人々は、海から見える様々な建造物を目印としてきた。伊予灘に突き出して見える小熊山古墳と御塔山古墳、海に浮かぶ市杵島の鳥居や海岸に面した鳥居、そして守江湾の岬の突端にあって辺りを照らす守江灯標などの目印は、人々が大切に守り続けてきたきたことで、今なお目にすることができている。

さらに、市内各地の漁村では、豊漁や海運安全祈願など海との関りが深い信仰が受け継がれている。海に浮かぶ市杵島に向かって鳥居を配する八幡奈多宮は、御田植祭、夏越祭、仲秋祭など、季節ごとの伝統的な祭礼を受け継いできた。なかでも夏越祭は、守江湾周辺の漁業関係者が集まって執り行うもので、浜での神事や海上を漁船がパレードする様子は、華やかな夏の風物詩となっている。このほか、王子八幡社の海を豊かにする山に感謝し、河口に御幣を供える夏祭や、海と山に挟まれ、道に沿って港町を形成する家々が立ち並ぶ町並みのなかを子供行列が巡行する冬の例祭、加貫漁港の八坂神社の祭礼、行事など、各地の漁村で海との関わりを表す活動が息づいている。

このような、海を通した人々の営みが、道しるべとなる建造物や町並みと一体となって歴史的風致を形成している。



寄港の道しるべにみる歴史的風致の範囲

コラム || 魚霊祭

魚霊祭は、美濃崎漁港や納屋漁港などの各地の漁村で行われている伝統的な夏の祭礼である。

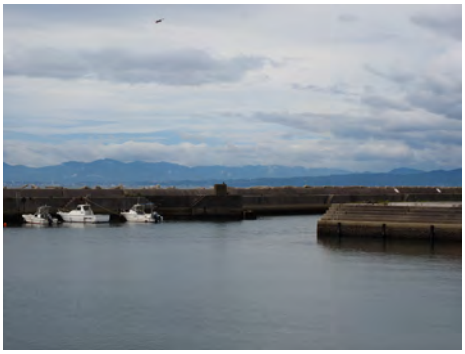
美濃崎漁港では、8月14日に、美濃崎漁港にある漁村センターの前で魚霊祭と盆踊り大会が行われる。午前中に漁村センターのなかに神棚を設置し、神主と漁業関係者によって神事が執り行われる。続いて伝馬船で海上に出てクルマエビの稚魚の放流を行う。神事後、お供えしたお神酒などを一緒に食す直会が行われる。20時から盆踊りがあり、地元の人をはじめ帰省した縁戚者など合わせて300人ほどが集まる。

コラム || 美濃崎漁港の十日恵比寿

美濃崎漁港を見下ろす小高い丘のうえにある恵比寿様では、漁師が航海安全と豊漁を祈願する十日恵比寿という祭りが行われている。82歳になる漁師によれば、自身が漁師として独り立ちした昭和34年（1959）から一度も中止することなく続いているという。もとは1月10日に行われていたが、現在は9月の休漁期間である10日から20日の休漁期間に行われている。小型底引網漁の漁師が中心となって行う祭りで、一艘の船から必ず一人参加することになっており、現在では30名ほどの漁師が集まる。参加する漁師のなかから持ち回りで祭りの準備役である座元が選ばれる。

祭り当日は、座元と若手で恵比寿様の周りを清掃し、美濃崎漁港にある漁村センターのなかに祭壇を設置して、米、鯛、果物を供え、神主による神事が行われる。神事のあとには直会がある。

コラム || 龍神様の信仰


龍神様

龍神様

加貫漁港は、東は見常寺鼻、西は生常鼻に挟まれた入江で昔は加貫浦といった。原始的な漁港だったが、時化や台風の時の風は大分・鶴崎方面に吹き抜けるため、船の避難場所として最適であった。そこで昭和38年（1963）に本市が2ヵ年計画で防波堤や荷揚場を近代的に改築した。その防波堤の先にコンクリートで作られた覆い屋があり、その中に龍神様と漁師たちから信仰される石祠がある。当初この浜の崖際にあったが、昭和40年（1965）の防波堤完成とともに移された。

5月の第2土曜日に加貫漁港防波堤端にある龍神様を祭る祭事が加貫地域の漁師によって行われる。大きな祭事ではなく、当日は龍神様を祀った石祠に新しい御幣を供え、豊漁・航海安全を願い神主による神事が執り行われる。龍神様を現在の場所に移動させる前までは、神事の時にお祓いをしてもらったお守りを漁師に配っていた。